
オヤジうさぎと愉快的日常

紫藤雪雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オヤジつなぎと愉快的な日常

【Nコード】

N5891I

【作者名】

紫藤雪華

【あらすじ】

オヤジつなぎと呼ばれるつなぎを中心に繰り広げられる森の国でのお話

第二章　く大富豪紳士ウサギとお酒

このオヤジうさぎ達が住む場所・・・森の国の中でもっとものもので
もっと栄えている中心街『ウリック』での一日

第二章　く大富豪紳士ウサギとお酒

ええ、ごっほん俺はオヤジうさぎであります!!

今回皆様には俺たちの住む森の国にある中心市ウリックを案内しま
しょう

とその前に何か来てるようですね

パカパカ

ヒィィ

ガチャ（馬車のドワが開く音）

馬車が俺の目の前で止まった

「着きましたよ」

そう執事うさが言っただワ開けた先から出てきたのは

「やく御苦労。久しぶりだな！おやじ！」

俺のことをこのあだ名で呼ぶのは・・・

「本当に久しぶりだな！！紳士！！」

紹介しようこいつは紳士ウサギこの国一番の大金持ちで

俺の酒飲み仲間だ

特徴はシルクハットとステキでいつも持っているだ

「そういえば今日は何し来たんだ？」

紳士ウサギは買い物などは何もしなくても執事であるきぐるみウサ
ギがやっているの

紳士ウサギ自ら来るのは非常に珍しいことである

「ん、今日は孫の誕生日プレゼントを買いに来たのだ」

「へ〜そうだったんだな。あの雪うさがか。早いな年がたつのが」

「そうなんだついこの前まで子供だと思っていたのにもう中校学舎に入るんだから」

中校学舎とはうさぎたちの学校である

ほかに小校学舎・高等学舎があり子うさぎたちは生まれ年から数えて10歳になると入学を始める

雪うさは紳士ウサギの息子の孫であるそして初孫なのでかなり激愛している

俺も屋敷に行ったときに何度か会っているので顔は知っている

それでもってかなりの美人だ（紳士が激愛するのもわかる気がする）

「あ、そうだよやじも一緒に選んでくれないか？そのほうが雪うさも喜ぶだろ」

しかし、雪うさはかなり俺に懐いている

こうして俺たちは紳士ウサギの馬車に乗って商店街に向かった

商店街はいろいろな店が密集していて森の国で一番にぎわっている

「ん、ここ何てどうだ？」

「おお、よさそうだ」

二人は街角にあったアクセサリィーショップに入った

ちなみにきぐるみウサギは馬車で待機している

「いらっしやいませ！！」

定員の明るい声が店に響いた

「色々あるな〜」

と紳士ウサギが悩んでいると

「何かお探しですか？」

「ああ、孫の誕生日プレゼントを探しているのですが」

「いいのが見つからなくて」

「どんなのをお求めですか？」
「もうすぐ中学制なので可愛いのがいいですね」
「でわ、こんなのはどうですか？今女子に人気なんですよ」
そう言っただけで見たのは
中心に赤い石がはめ込まれたペンダントだった
「いいんじゃないか。雪うさが喜びそうじゃないか」
「うんこれにしよう」
「ありがとうございます。レジはこちらです。」
そう言っただけで定員が紳士ウサギをレジまで連れてった

数分後

「お待たせ行こうか」

「ああ」

馬車の中で二人は話していた

「今日はありがとうお礼に昼食は私が奢ろう何がおいしいオヤジ？」

「お！良いのか？」

「良いとも」

「じゃ〜 ソフト梅焼き ！！」

「ああ！あれか、私も久しぶりだよしぎぐるみ《蓬萊縁》に向かっ
てくれ」

「はい、わかりました」

馬車は商店街から一本道を外れて木材出来た居酒屋で止まった

パカパカ

ヒィ〜

「着きました」

「御苦労」

「ありがとうよきぐるみ！」

ガラガラ

「いつらしゃ、おお紳士にオヤジじゃないか」

「久しぶりだな鉄板兎」

鉄板兎はこの《蓬萊縁》店主でありオヤジうさぎと紳士ウサギの古なじみで

お酒とソフト梅焼きはここで食べると決めているくらい

よく来ている店である

ソフト梅焼きとはこの店の名物で小麦粉に卵やキャベツなどを入れた中に

梅干しを入れて鉄板で焼いてソースと青のりをかけたものである

「今日は何だ？」

「《ソフト梅焼き》を2つ」

「あいよ!」

数分後

「お待ちどうさま」

「ありがとうございます」

ぱっく

「う〜んうまい!やっぱり此処のが一番だな」

「そうだな」

「そう言ってもらえると作りがいがあるな」

そして食べながら3人は色々なこと話していると

きぐるみウサギが店の中に入ってきた

「失礼します」

「ん、どうしたきぐるみ？」

きぐるみウサギは紳士ウサギの耳元にそっと耳打ちをした

「実はかくかくしかじかで」

「そうか、分かった」

「それでは失礼します」

そう言ってきぐるみウサギは店から出て行った

「おやじ明日の雪うさの誕生日に来てくれないか？」

「どうしてだ？」

「実はさつき雪づさから来てくれないかと頼まれたんだ」

「うんそうか、分かったなら行こう」

「ありがとう、明日こちらから迎えの者をよこそう」

そうしてこの話は此処終了し今度はお酒を飲みながら話に花を咲かせた

二人が店を出るころにはすっかり夜になっていた

「ありがとうな送ってくれて」

「気にするな帰り道の途中だ」

「また、明日な」

「ああ」

「そろそろ出発します」

こうして馬車は遠ざかっていった

誕生会編へ続く

第二章 く大富豪紳士ウサギとお酒（後書き）

この下手な小説を読んでくださってありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5891i/>

オヤジうさぎと愉快的日常

2010年10月14日14時17分発行